

「マリアの時代」のユイスマンス

岩渕邦子
Kuniko IWABUCHI

外国語教育講座

序章

ゾラとユイスマンス

ユイスマンス抜きでゾラを語りうるとしてもゾラ抜きでユイスマンスを語ることは不可能であろう。定年に至るまで内務省役人として勤務し続けた一方でユイスマンスが作家としての経歴をも残すことが出来たのはゾラに負うところ頗る大であった。

ゾラとユイスマンスは当初は親しい文学仲間として、《メダンのグループ》形成後は意欲的な師匠ゾラとその忠実な弟子ユイスマンスとしての交際があった。しかし、最終的には両者は互いに対立的立場に立つに至る。より具体的にいえば、自然主義に踏み止まってルーゴン＝マッカール叢書を完結させ、晩年はその優れたジャーナリスト的資質を存分に発揮してドレフェース事件に深く関与していったゾラと、それとはまるで逆にひたすらカトリックの修道院に人生の最終的居場所を見出そうと努めたユイスマンスに分かれるということである。両者が見せたこの最終的な差異の大きさは我々を驚かせる。当初、互いに共感するものがあり、小説家として似たような出発をした二人の人生行路が年月の経過と共にこのようにまで違ってしまったのは何故であろうか。

科学と宗教の関ぎ合い

それは巨大な対立物を呑み込んでいる19世紀という時代そのものの特殊性に根差しているとは言えないであろうか。例えばダーウィンの『種の起源』の初版本の英国における刊行年の前年に当たる1858年にフランスでは聖地ルルドを生み出すことになる聖母マリアの出現がマサビエル洞窟で起こっている。最先端を行く科学上の快挙と神秘的な謎に満ちた事象が肩を並べているのである。しかもそれが19世紀も中葉を過ぎた時点で、ヨーロッパにおいてなのである。

次の引用に見る関一敏氏の指摘は興味深い。

19世紀から現在に至る両世紀はカトリック世界では「マリアの時代」と呼ばれることがある。イエスの聖心とならんで聖母マリアへの信仰が、教義的裏付けを与えられつつ、修道会・聖地巡礼の実践において著しい活力を示したからである。この趨勢をよくあらわすのは1830年にはじまるお

びただしい数の「聖母出現」の事例であろう。1967年までの137年間に各司教区調査委員会の検討にゆだねられた件数だけでも187に達し、うち11件が教会の許可をえてマリア巡礼地の資格を獲得している¹。

関氏は又、英米における「近代スピリチュアリズム」の発生・興隆の事情にも言及し、それが19世紀フランスでの「マリアの時代」と時期的にほぼ重なることを指摘されている。このことに関して氏は次のように述べておられる。

ここでいう同時代性は、たんに時間軸上の並列関係ではない。結果として19世紀に集中して現象するようなその時々々の社会と文化のありようの水位にかかわる問題である。聖母出現とスピリチュアリズムから読みとれる共通項は、いわゆる教会聖職者や宗教的職能者による限定された媒介をはなれた、大衆の状況での他界との交信のころみということである。

その背景としては産業革命による技術革新の社会浸透、すなわち特権者による技術の寡占状況から社会的共有という事態が見られることであり、宗教界もまた他界からのメッセージと媒体の共有方法においてこれと歩みをあわせてきた点が指摘される²。

欧米の19世紀は科学と進歩の時代であると同時に、神秘主義の繁栄期でもあり、奇蹟への傾斜の時代でもあったのである。この観点に立つのであればユイスマンスの回心になるまでの精神の揺れ、及びそれについての解釈も従来行われてきたものとは余程違ってくるのではあるまいか。つまり、19世紀について科学・技術の目覚ましい進歩の世紀という面のみが一方向的に強調されすぎるとそのような時代に身を置きながらカトリシズムに帰依したなどというといかにも時代の潮流に背を向けた、帰依者本人の頑なさが必要以上に際立ってしまうのである。

ところが19世紀のみならず20世紀においてさえ科学と宗教の熱い関ぎ合いが続いていたとなるとそれが緩和され、例えばユイスマンスが辿った人生行路もそのような時代状況に置いてみるならば穏当な選択の一つであったのだと理解可能になる。そしてユイスマンスの作品に同時代の広範な人々から共感が寄せられた事

実も了解される。

う。

聖母出現

さて先の引用箇所中、フランスで頻発した「聖母出現」に筆者としては大いに関心がある。教会が正式に認めたという11件の聖母出現のうち、ユイスマンスの生前中彼に何らかの影響を持ち得たものに限定すれば、19世紀中に起こったものということになり、

- ① 1830年、パリ7区バック街の事象
- ② 1846年、ラ・サレットの事象
- ③ 1858年、ルルドの事象
- ④ 1865年～1867年、イラカの事象
- ⑤ 1866年、フィリップスドルフの事象
- ⑥ 1871年、ポンマンの事象
- ⑦ 1879年、ノックの事象

以上、①～⑦の計7件となる。

19、20両世紀にまたがる「聖母出現」頻発の口火を切ったものとして特別視されている1830年のパリ7区バック街の事例を軽視することは出来ないとして、更に上記7件のうちユイスマンスの小説、ひいてはその生涯に深い係わりを持つものに限定すれば、1846年のラ・サレットの事象及び1858年のルルドの事象の2件ということになる。以下、これら3件の事象につきその事実経過を辿りつつユイスマンス自身のそれらへの係わり方を調べて行きたい。

第一章

バック街の事象

時 間：1830年

場 所：パリ7区バック街140番地所在の女子修道会、「愛徳姉妹会」(Sœurs de la charité)の礼拝堂

体験主体：カトリーヌ・ラブレ (Catherine Labouré) (1806～1876)【当時24歳で上記修道会の修練女であった】

出現回数：3回

補足説明)

※ 出現者(=聖母)はメダル製造を要求した。(メダルの両面に施すべき図柄の提示も視覚的になされたという)

※ 聖母出現の2年後(=1832)にメダルが製造され頒布された。

※ メダルは当時パリに流行していたコレラに対するお守りとして機能し更に数々の奇蹟をも生むこととなった。又、コレラのみではなく半身不随、狂犬病、癲癩の快癒の例もあったという。メダルの奇蹟を目の当たりにして無神論者たちの回心が多く見られたとい

ユイスマンス馴染みの界隈で

本事象の場合、聖母の出現はパリ7区バック街一角のとある女子修道院の礼拝堂で起こった。バック通りはセーヴル通りと交差し、その交差点角にボン・マルシェデパートが建っている。デパートから見るとバック通りはデパートの裏手にある細い道で南北に伸びている、ということになる。19世紀前半にはお屋敷街として知られたフォブール・サンジェルマンが近くにあり、セーヌ左岸独特の落ち着いた雰囲気は漂う一帯である。

ユイスマンスとバック街の係わりでいうと、彼にとってバック街は

1)1856年に入学した寄宿学校、オルテュス学院の有ったところ(当時彼は8歳前後であった)

2)内務省に勤務していた時代は、終業後決まって気晴らしに歩く馴染みの散歩コース

3)【彼方】脱稿後(1891年)、回心に至るまでの精神的に不安定な時期には、魂の後見人役を引き受けてくれたミュニエ神父(1853～)を訪ねて頻繁に通ったサン＝トマ＝ダカン(=教会名)があった所である。ユイスマンスが慣れ親しんだこの界隈であった聖母出現であるのに意外にも彼はこれに関しては何の言及も行っていない。

体験主体者と教会の対立的事態

ところで本事象にあって特筆すべきことは、聖母出現時に体験主体、C. ラブレの記憶に刻み込まれたマリアの視覚的イメージが細部に至るまで克明なものであり、しかも彼女にあっては終生それが非常に鮮明なまま保たれ続けたことであろう。そして彼女の目に焼き付いた出現時の聖母マリアのその鮮明なイメージは、カトリック教会の伝統的なイコノグラフィーには見出すことの出来ない特殊なものであった。そのため教会側は出現のあった女子修道院の礼拝堂に、出現時のマリアの姿をそっくり再現したと思われる像(メダルの図柄と同じもの)を設置したのであるが(1849年)、それは到底C. ラブレの満足するものではなく、為に種々のトラブルが生じ、最終的な調整が図られるまでに優に半世紀を要してしまったのである。

そのような事態になったのは、教会内部に厳然としてある身分上の格差の問題が大きかったと思われる。

この件の関係者としては、

体験主体、C. ラブレ本人

C. ラブレの告解者としてのアラデル神父

アラデル神父の上位者としてのド・ケラン大司教

C. ラブレの同僚、修道女シスター・デュフェス

(J. Dufes) (1822～1908)

ローマ典礼聖省 (Congregation des Rite)

ティエル枢機卿 (B. Thiel)

ローマ法王, レオ13世 (1878~1903)

を挙げる事が出来るが、事に対処するに当たって各人が占める教会内のポジションが常に最優先で考慮され、自分の記憶や判断よりも上級者の意向を重んじそれに沿おうとする傾向が見られるのである。

C. ラブレは一介の修道女であり、聖母出現のあった時点では更に下位の修練女でしかなかった。彼女は1832年、初頒布されたメダルに刻まれたマリアの像(それはアラデル神父が最終的には自身の判断で業者に発注したものであった)に不満を持ちながら、アラデル神父の生前はその不満を表面化させることは無かった。(メダル頒布の実施に至るまで、業者への発注等も含め実務関係の全てを取り仕切ったのはアラデル神父であった)

彼女が、メダルに刻まれ又礼拝堂に設置されてしまった不正確なマリア像に関する不満を打ち明けたのは同僚の修道女、シスター・デュフェスに対してであった。しかもそれは自身の死の僅か数ヶ月前のことではなかったという。メダル頒布後、メダル製造の由来を大略伝える‘バック街における聖母マリア出現譚’とも言べき文書が大衆の強い関心に押される形で書かれたが(1834年)それすら体験主体のC. ラブレが執筆したわけではなかった。それは、彼女の告解神父、アラデルの筆になるものであった。しかも当初は筆者の名は記されず、C. ラブレには事前に何の相談もなされなかった³。しかしながらC. ラブレ本人の聖母出現に関する手稿は存在したのである。それがようやく公表されるに至ったのは1878年のことであり、彼女の死後2年ほど経過してからのことであった。

C. ラブレとは同僚のシスター・デュフェスは彼女から、メダルの図柄として又、礼拝堂内主祭壇上の像として現実に流布しているマリア像に関する不満を打ち明けられて初めて真相を知り彼女に大いに同情する。そこでシスター・デュフェスは彼女に協力して出現時のマリアの姿を正確に表している石膏像をサン・シュルピス界限の職人に作らせるところまで事態を進展させた。しかしシスター・デュフェスは、その像を小振りなサイズのものとどめたし更にそれを目立たぬ様に自分の書斎に置くのが精一杯であった。

ここでメダル製造の初期の段階に立ち戻り、アラデル神父がイメージするマリア像がどのような経過で成立するに至ったのかを見ておこう。

C. ラブレの要請により、アラデル神父がド・ケラン大司教にメダル製造の許可を願い出た時、聖母信仰

に篤い大司教は大いに乗り気になりメダル製造の許可を与えた。しかし大司教としてはそれが「無原罪の宿り」の教義を守り立てる上でも有効なものになることを強く望んだ。従って大司教はその趣旨の指示をすることも忘れなかった。一方その様な指示をされたアラデル神父は最優先で大司教の意図を尊重することを考え又、C. ラブレからは出現時のマリアの特異な様子も聞いていたので彼としては最終的には両者の要望を取り入れた、次の引用に見るようなマリア像が最適と判断したのであった。

大きな球体 (=地球) の上で蛇を踏みしだく聖母像 (……) うつむき加減の視線と両手を下方に開いた仕草は「無原罪の宿り」の伝統的イコノグラフィーの一類型である。ただ、両手から足下の地球に向って光の束が放射状に落ちている点に特色が見られる。この聖母像は「奇蹟のメダル」(1832)と俗に言われるメダルと同一の形象を持ち、背後の壁にはやはりメダル同様次の文字が弧を描いて彫られている。“O MARIE CONCUE SANS PECHE PRIEZ POUR NOUS QUI AVONS RECOURS A VOUS” (おおマリア、罪なく宿されしもの、救いを求める我らのために祈り給え)。

他方、C. ラブレの脳裏に焼き付いているマリア像は次の様なものであった。

聖母は……地球を表す球体を手にしていた。ゆったりと胸のあたりに球をもって目を天に向けていた。その顔はじつに美しく、得も言われぬほどだった。聖母の指に宝石のついた指輪が見えた。光沢も大きさも異なるそれらの指輪から、さまざまな光が放たれていた。放射状に下へと広がっていて、私には聖母の足下がもはや見えなくなっていた。

さてシスター・デュフェスが自分の書斎に置いていた小振りなサイズの聖母像(フロック・ロベール作; 石膏製)は、時の修道会長の尽力等によりその拡大された石膏像がバック街の女子修道院礼拝堂内に、しかもかねてよりC. ラブレが切望していた通り、聖母が出現したのと同じ位置に設置される運びとなった⁴(1880年; 丁度出現50周年に当たるこの年から女子修道院の礼拝堂は巡礼者に開放されることとなったのである)。しかしこの後もローマの典礼聖省の判断で「地球」の聖母像と呼ばれる当該像は一時撤去される憂き目に会った(1881年)。この措置を解消する上で有効だったのはティエル枢機卿による教皇レオ13世への働きかけであった(1885年)。次の引用文を参照いただきたい。

その際に教皇は厳守すべき次の交換条件を与えた。「愛徳姉妹会の一女性が得たとされる啓示に関することがらをこの聖母像について語ることは絶対に好ましくない」

これにより教皇がローマの典礼聖省と同じ事を憂慮していたことが分かる。つまり教皇も「奇蹟のメダル」の聖母像として既に流布しているものとは異なるマリア像が新たに登場してくることを望まなかったのである。

目にも眩い光の束

序章の引用文に見たように1830年のバック街における聖母出現が19、20両世紀にわたって頻出する「聖母出現」の嚆矢となった。

体験主体、C. ラブレにとっては統一的に感得された聖母のアトリビュートとしての‘地球’と‘目にも眩い光の束’は上述したような事情により「光」の聖母と「地球」の聖母に分裂して解釈されることになってしまったが、その出現のタイミング、ロケーションと共にこのアトリビュートを再考してみる時、このバック街における出現がいかにも嚆矢として位置付けられるにふさわしい事象であったことが了解されるのである。それは伝統的なイコノグラフィに縛られて時代の目覚しい進展振りに付いて行けなくなっている老朽化したカトリック教会を置き去りにするほどの斬新さに満ちていたと言えないだろうか。

1830年はパリにおけるガス燈普及の年である。ガス燈は従来に無い異質な明るさをもたらしお陰でパリ市民は昼間に劣らず夜間も盛んに活動し始める。同じくパリに登場したマガザン・ド・ヌーヴォーテが巻き起こした商業革命、これらもまたガス燈普及という更に一段と有利な新条件を得て質的变化を遂げそこに生まれたのがデパートである。そして初代デパートといえはプシコーが創業したボン・マルシェデパートである。パリ7区バック街における聖母出現はこれら全てを巧みに表象し、従来の尺度が通用しない全く新しい時代の到来を告げているのではないだろうか。

第二章

これについては『大伽藍』（1898年）の第一章に書き込まれているものから見てゆくことにしたい。但し、出口裕弘氏の翻訳書（『大伽藍』世界異端の文学II、桃源社、1966年）では、本稿で取り上げたい「マリアについての瞑想」とでも言うべき部分（ここにラ・サレット及びルルドに関する記述も含まれている）が、抄訳の関係で抜け落ちている（氏が“訳者あとがき”で述べておられる通り）事を申し添えておく。

『大伽藍』第一章のあらまし

デュルタルは未明、シャルトル寺院にゆく。そして聖母が夜明けと共に再開する謁見を待つ彼は大樹の下にたまたまあった腰掛に腰を下ろしマリアについての瞑想に耽る。（これが導入部となり以下、デュルタル

に託してユイスマンス自身の「マリア論」というべきものが展開される）

まず、回心に至るまでの混迷期、ずっとデュルタルを見守ってくれていたマリアへの感謝の念が述べられる。ついで、人類の悩みに寄り添ってくれるマリアの優しさが讃えられる。そしていよいよマリアと人類を結ぶ絆についてデュルタル（＝ユイスマンス）独自の説が展開される。

受肉（incarnation）した神の子としてのイエス・キリストを宿したマリアの喜びの大本を辿ってゆくと、人類がもはや自力では償い切れない程の悪を働いてしまった事態に突き当たる。すなわち本来は人類が自身で責任を負うべき、しかし現実には負いきれない程に達している悪の極みが至高の善（＝神）を出来させたことになり、マリアの喜びもそこに根差していることになる。この意表をつく因縁により人類とマリアは互いに宿命的な絆で固く結ばれている、というわけである。その因縁説に立脚すると「聖母出現」は次のように解釈される。

Elle était en effet l'obligée de nos fautes, car sans le péché de l'homme, Jésus ne serait point sous l'aspect peccamineux de notre ressemblance et Elle n'aurait pu dès lors être la génitrice immaculée d'un Dieu, (...) Dès lors, par une humilité prodigieuse, Elle s'était mise à la portée des foules: à différentes époques, Elle avait surgi dans les lieux les plus divers, tantôt sortant ainsi que de sous terre, tantôt rasant les gouffres, descendant sur des pics désolés de monts, traînant après Elle des multitudes, opérant des cures; (...) [LA CATHEDRALE p. 12]

ユイスマンスと聖母マリア

ユイスマンスが聖母マリアに取り纏ったそもそもの切っ掛けは『彼方』執筆中に蒙った精神的不安定であった。黒ミサや秘術の方面にまで手を出したおかげか作家として擲んだ初の大成功の手応えは彼の自尊心を大いに満足させるものであった。しかし、この成功は彼の心身の健康喪失を代償とするものであった。

更に生理的欲求に常に屈服してしまう惨めさが彼を打ちのめした。彼は何としても生活の立て直しを図りたがっていた。

『彼方』を手懸けたことにより広大無辺な霊界の存在を確信するに至ったユイスマンスは密かにセーヌ左岸で教会巡りを始めるようになる。礼拝堂に入って信者や儀式の様子を眺め、祈りに耳を傾け清浄そのものの聖歌の響きに魅せられるようになる。そしてマリア

に取り纏めることで念願の回心にこぎつけることも出来た。この様な経過からユイスマンスがマリアに大恩を感じていたのは明らかである。『大伽藍』の第一章の克明な描写に読み取れるようにシャルトル大寺院の内部は隅々に至るまでマリア賛美に満ち満ちている。ユイスマンスがマリアへの感謝を捧げるのにそれ以上にふさわしい寺院は他に見出しえなかったことであろう。

彼が『大伽藍』執筆の為に資料集めに没頭するのは1896年のことであり回心の年から既に4年の歳月が経過していた。当初、キリスト教の諸教義は常識や論理的思考がまるで通用しない難物としてユイスマンスを面食らわせていたのであるが、今やそれらは彼の自家業筆中のものであり、彼が自分独自の解釈や見解を交えつつ自在にそれらについて語り得るまでになっているのはさすがである。興味深いのは、この頃には、ユイスマンスが聖母出現も有り得る事として受け入れていることである。又彼はラ・サレットの事象、ルルドの事象の両方から何十年と隔たった時点にいる、それは両事象を一連のものとして眺めることが出来る時点である。そのため彼には、両聖地を絶えず比較しながら聖母出現の意味についての考察に耽ることが可能になっているのである。

互いに正反対のラ・サレットとルルド

ユイスマンスは『彼方』に関する仕事を1891年4月に全て終え同年7月にブーラン、ジュリー・ティボーと共にラ・サレット巡礼の旅に出掛けている。ルルドについては『献身者』関係の仕事が片付いた1903年3月に初めて訪れている。従って『大伽藍』執筆の時点ではルルドに関しては直接的な体験はしていない。しかし新聞、雑誌、映像等によりルルドの様子は詳しく知っていたと思われる。断言してよいことは、ラ・サレットとルルドではロケーション、アクセス、景観をはじめとして全てが正反対であるということである。

Douze ans, en effet, après l'événement de la Salette, la Vierge se montra, non plus dans le Dauphine, cette fois, mais dans le fond de la Gascogne. Après la Mère des larmes, après Notre-Dame des Sept-Douleurs, c'est la Madone des sourires, Notre-Dame de l'Immaculée Conception, la Tenancière des glorieuses Joies, qui se présente; et, la aussi, Elle révèle à une bergère l'existence d'une source qui guérit les maux. Et c'est ici que l'effarement commence. L'on peut dire que Lourdes est tout l'opposé de la Salette; (...) [LA CATHÉDRALE p. 23]

以上、『大伽藍』の第一章に見られるラ・サレットへ

の言及箇所を見てきたが不足と思われる事項に付き補足を試みておきたい。

ラ・サレットにおける聖母出現

時 1846年9月19日(土)、昼下がり
場 所：アルプス山中(高度1770mの山頂にて)
体験主体：ピエール＝マクシマン・ジロー
(Pierre-Maximin Giraud)
(1835—1875; 当時11歳)
フランソワーズ＝メラニー・マチュー
(Francoise-Mélanie Mathieu)
(1831—1904; 当時15歳)
出現回数：1回(約30分間に及ぶ)

補足説明)

※ 事の次第はピエールとフランソワーズの雇主らの口を経てジャック・ペラン(Jacques Perrin)司祭に伝えられる。

※ 翌9月20日(日)、この事象は当地の教会で早速、日曜説教に取り上げられたため地元の信者の知るところとなる。

※ 出現した聖母の黙示録的なメッセージ(=「腐った麦」)は9月20日に、メラニーの雇主、バティスト・プラ(Baptiste Pra)によって口述筆記され、その写しが人々の手から手へと伝えられた。(ラ・サレットに出現したマリアは la Madone des Pleurs と言われる、彼女は sangloter し、非難し、脅しの言葉を吐いたという⁵)

※ 数日後(9月25日?), 出現場所を再訪したマクシマンがそれまで無かった泉の存在に気付く。(その日同行した四人の女性の内の一人(12歳?)に泉の水が奇蹟を起こす、眼病と痘痕が治る)

※ コール(Corps)のピエール・メラン(Pierre Melin (1810—1874; コール教会在職は1841年から1865年まで))司祭は、グルノーブル教区司教のフィリベール・ブルイヤール(Philibert de Bruillard (1765—1860; グルノーブル司教在職は1826年から1853年まで))宛てに書簡を送る(当該事象報告のため; メラン司祭は、出現者(=聖母)が腰掛けた岩を砕き、それらを保管中であることも書き添えたという)。

ユイスマンスのラ・サレットへの思い入れ

聖地としては先発のラ・サレットで多くの反省点に気付くと今度はルルドで全てラ・サレットとは逆の行き方を追究し、大衆迎合的なその方式が時代に合っているとの感触を得るや今度は本格的にルルドに全力を集中させて新興の聖地に育て上げる一方で、聖地ラ・サレットの方は寂れるままに放置する、というラ・サレットとルルドの両聖地で見られた現実の経過を改めて振り返ってみると、自ずとそれら全てのプロセスに係

わっていたマリアの意図が読めるようにデュルタル (=ユイスマンス)には思われるのであった。マリアは選り好みすることは自らに禁じ、どのような種類の人間をも教会に招こうとし、その為に、出現場所、出現時の身なり、表情、メッセージ内容等にわたりいろいろな型の人間の気に入るように工夫し、努めていることも了解出来た。デュルタルはマリアの意向を推量しつつ今更のように、人間にはいろいろなタイプがあることを思わずにはいられない。信仰上の辛さや厳しさをこそ良しとしてそれに食付いてゆく人々がいるかと思えば、楽々とこなせる課題のみを好み、少しでも厳しくなるとすぐに嫌気がさして背を向けてしまう人々もいる……

ユイスマンスは『彼方』執筆によってすっかり黒く汚れてしまったと感じていた自分の魂を浄化し真っ白にしたいと切望するようになったのだった。作家としても「黒い本」はもう卒業し、今度は「白い本」を書きたいと願うようになったのであった⁹。そうした思いが極まった1891年の夏(当時43歳)にユイスマンスは聖地ラ・サレット巡礼を試みたのであった。

当時ラ・サレットは聖地としては凋落し、アメリカも含め世界中から巡礼者を集めていたかつての繁栄振りを失っていた。それは大きくアクセスの悪さに原因していたといえる。まず最寄りの駅に行くまでが既に極めて煩雑であった。当該駅に着いてからも山の頂きに位置する泉を含む聖なる場所に達するのは更に大変であった。途中、目にする景観は素晴らしいものの行路は急峻を極める。少し楽をしたいと思っても当時は精々驃馬の使用が可能なくらいであった。途中の宿泊所では蚤にたかれ、翌日は寝不足のままに辛い登山を強いられる。そのような試練の後、山の頂きにある御出現のスポットに辿り着いても草木も生えぬ荒涼たる眺めがあるばかりで、しかも聖母出現を模した再現場面は芸術的な見地からは首を捻りたくなるようなものでしかない。

上記のような理由によりユイスマンスは聖地ラ・サレットを再訪することは無かったが、ラ・サレット、ルルドの両聖地の内、どちらを取るかといえば、やはり辛さ、厳しさにこそ惹かれる型の人間として彼がラ・サレットの方を取るであろう事はよく理解できるのである。

第三章

ルルドにおける聖母出現

時 間 : 1858年2月11日(休)~7月16日(金)

場 所 : ルルドの町外れにあるマサビエル洞窟

体験主体 : ベルナデット・スピルー (1844-1879)
(当時14歳)

出現回数 : 18回

補足説明)

※ 女友達二人と連れ立ってマサビエルの岩場に薪拾いに出掛けた時最初の出現を体験する。ベルナデットは出現した未知の女人への恐怖感から思わずロザリオを取り出し祈ったという。(=ロザリオの祈り)

※ 初めの2回(=2月11日(休);2月14日(日))は出現者は微笑するのみで無言であった。3回目(=2月18日(休))に出現者はベルナデットに、以後15回に及ぶ洞窟への来訪を要請した。(参考:「ここに15日間来てください」「あなたの幸せはあの世で」)

※ 4回目(=2月19日(金))以降、マサビエル洞窟で何か不思議なことが起こっているらしいという噂がルルドの町中に広まったらしく、見物の群衆が急速に膨れ上がり、ベルナデットの行為はその群衆によって見守られるようになる。そのような群衆にインテリと言われる人々も加わるようになったのは7回目(=2月23日(火))以降といわれる。

※ 8回目(=2月24日(休)):ベルナデットは出現者の指示に従い群衆の面前で大地に接吻する。

※ 9回目(=2月25日(休)):ベルナデットは同じく出現者の指示通り、大地への接吻を行った他に、マサビエル洞窟前の地面の割れ目を掘り、出てきた泥水を飲み、又それで顔を洗いあたりの草を食べた。(参考:「泉の水を飲み、顔を洗い、そこにある草を食べなさい」)

※ 13回目(=3月2日(火)):出現者よりベルナデットに「司祭に行列と礼拝堂を頼みに行きなさい」との指示がなされる。ルルド教会の司祭、ペイラマルはその旨、報告に来たベルナデットに出現者の名を聞くように指示する。

※ 14回目(=3月3日(休)):ベルナデットが司祭からの指示通り、出現者に名前を尋ねても出現者は微笑するのみで答えなかった。

※ 15回目(=3月4日(休)):ベルナデットは出現者に名前告知と「バラの奇蹟⁷」を願う。これらの要請に対しても出現者は前と同様、微笑するのみであった。その報告を受けてペイラマル司祭は大いに落胆する。

※ 16回目(3月25日(休)):その日は丁度、「受胎告知」の祝日に当たっていたのであるが、今日こそはと食いつけるベルナデットに対して出現者はようやく口を開いた、「私は無原罪の宿りです」と。教理問答など学ぶ機会も無かったベルナデットは出現者のメッセージの意味を理解出来ないまま、聞いた通りをペイラマル司祭に伝える。教会側の代表としてずっと慎重な態度を崩さずに来たペイラマル司祭であったがさすがにそれを聞いて驚き、出現者が聖母マリアであるとの確信を得るに至る。そして早速、司教に当該事象についての報告の手紙を書く。

※ 最終局面:1858年7月21日に司教区調査委員会

(Commission épiscopale)が組織される。そして2年余の調査(=通常通りのペース)を経た後、1862年1月18日に「マサビエル洞窟の聖母出現」をカトリック教会として正式に認める教書が発表された。

ベルナデットを育んだ地域

ルルドを含むピゴール(=地域名)はピレネー山麓地帯であり、それはコートレ(Cautrets)；バニェール(Bagnères)；バレージュ(Barèges)という三大湯治場を擁し、18世紀末から19世紀前半に一種の湯治ブームの時期があったという⁸。そのような事情からすると、その地域一帯の住民には病と苦痛を軽減する湧き水への慣れと親しみがあリ、その上、当地にあっては湯治場の湯水は水浴用と飲料用の両方に用いられていたというから、マサビエル洞窟の出現者の「(湧き水を)飲みなさい」「(湧き水で)洗いなさい」という指示は土着の人々にとってはさしたる抵抗感無く受け入れることが出来る筈のものであったであろうことが了解される。

又、そもそもベルナデットを育んだピレネー山麓地帯自体が伝統的にマリア信仰の強い地域であったことも想起されなければならないであろう。それは、そこが昔、イベリア半島に続いてあわやサラセン軍に飲み込まれそうになった地域であったことと深く関連しているであろう。

イベリア半島を制圧し勢い付いたサラセンの騎馬軍団はピレネー山脈を超えフランク側に雪崩れ込んできたのであった(732年)。官宰、カール=マルテル(689-741)が率いるフランク軍が死闘の末、その食止めにやっと成功したのであった(トゥール=ポワティエの闘い)。今も色濃く中世都市の面影を残すポワティエの町は、その丘の上に立つ金色のマリア像によって見守られているが如くであるという。際どいところでサラセン軍に勝利して以来、守護神としても大いに頼りになるマリアは熱い祈りの対象となったことと思われる。

泉の奇蹟に与れなかったベルナデット

ところでベルナデットはルルドの泉の奇蹟に与れぬままその生涯を終えたのであった。実際、マサビエル洞窟における出来事が決着を見た後の1866年、ベルナデットは22歳でヌヴェール愛徳女子修道会(Sœurs de la Charité et de l'Instruction Chrétienne de Nevers)に入った。そこでの彼女の任務は「病み続ける」ことであつたという。彼女はこの任務に忠実に従った後35歳の若さで死去している。そこに働いているのは「贖罪(pénitence)」の考え方であろう。自分が精神的あるいは肉体的な苦しみを引き受けることによって人類が犯した罪悪を贖い、人類に課せられている罪悪の償いにたとえ微力であろうとも貢献することは、カトリック

教会では有意義な行いであると位置付けられている。マサビエル洞窟に出現した聖母が個人としてのベルナデットに一貫して課そうとしていたのは実はそのことであつたらしい⁹。

とは言え、手の届くそこに自らが端緒を開いたルルドの泉があり、しかもその泉では現実に奇蹟の大盤振る舞いと言って良いほど頻繁に、難病治癒の奇蹟が起こっているというのに予めその恩恵に浴することが禁じられていたのも同然だったベルナデット。その生涯を贖罪の苦行に捧げ尽くす事を任務として課されていたベルナデット、そしてそれを甘受していたベルナデット……彼女のその姿は、逃げようの無い病苦を課された晩年のユイスマンスの姿に重なるものがあるとおもわれるのである。

回心を経てキリスト者となった後でも聖地ラ・サレット、聖地ルルドの欠陥面ばかりに目が行き、辛辣な批判を止めなかったユイスマンス。彼にあっては勿論ベルナデットの場合とは異なる文脈によってではあるが、当初からどちらの聖地に於いてもその泉の奇蹟に与ることは断念していたと思われる節がある。それではユイスマンスはキリスト者として一体何処に支えを見出し、精神的安定を得ていたのであろうか。それは神秘神学の「身代わりの教理¹⁰」であつたと思われる。

『出発』と『聖女リドヴィナ』で、彼は既に神秘神学の身代わりの教理を称揚していた。『献身者』の中で、彼はそのもっとも最初の起源、キリスト磔刑にまで遡らせ、それを再び取り上げた。彼は忘れ難い言葉で苦痛を褒め称え、擬人化し、キリストの婚約者になぞらえた。そしてゲッセマネで苦痛が「ルビー色の汗と血の雫の王冠」を神たる婚約者に授け、「彼女の振り撒く唯一の魅惑たる、恐ろしい超人的な苦しみ」をキリストに惜しみなく注ぐ姿を描いた¹¹。

マリアも、マグダラのマリアも聖女たちも、絶えず彼の後に付いて歩むことは出来なかった。彼女だけが、審問の場や、ヘロデ王やピラトのところまで付いて行った。彼女は鞭の革紐を検分し、荆棘の巻きつき方を直し、槌の鉄の部分を重ね、胆汁の苦さを確かめ、槍の穂先を鋭くし、釘の先を念を入れて尖らせた。

そして、マリアとマグダラのマリアと聖ヨハネが十字架の足下に涙にくれて立っているさなか、結婚の最高の瞬間がやってきた時、聖フランチェスコの語る貧しさのように、決然として十字架という床にあがった。地上で排斥された者同士のこの結合から教会が生れた。それは、生贄の心臓から血潮となり、滝津瀬となって出てきた。それで終りだった。キリストは不感無覚となり、永久に彼女の抱擁から逃れ去った。彼女は、愛されたその瞬間に、寡婦となった。しかし彼女は、この愛によって名誉を回復し、この死によって贖われ、十字架の丘から下りてきた。

救世主同様、非難されながら、彼女は彼とともに高みに昇り、彼女もまた十字架の高みから世界を支配したのであった。彼女の使命は認められ、高貴なものとなされた。彼女は以後キリスト教徒にとって納得のゆくものとなり、自分や他の人々の罪の贖いを早めるため彼女に訴える魂に、そしてキリストの受難の形見として、まねびとして彼女を愛する魂に、世の終りまで愛されるだろう¹²。

ユイスマンスのルルド訪問

ユイスマンスがルルドを最初に訪れたのは1903年のことであり、その年3月に彼は『献身者』の刊行を済ませていた。大仕事が一段落したので気持ちにゆとりが出来たのであろう、彼はルルド在住の知人、ルクレール夫妻のかねてよりの招待に応える気分になっていた。

1903年3月5日、ユイスマンスはルルドへと出発した。ルルドでは彼はルクレール夫妻の世話により、滞在用に一軒家を借り切ることが出来た。その家の窓からは大規模なルルドの新教会は勿論、昼夜を問わず蠟燭の火がともるマサビエル洞窟、ピレネー山脈の連峰等も眺めることが出来た。

『献身者』の刊行に伴う雑事処理による疲れを残しつつも、彼は早速、ルルドに関する小説の執筆に備えて克明なノートを取り始める。更に早くも彼は地元の若い某神父と知り合いになり、ルルドにおける資料収集に好都合な協力者を得ることに成功したりしている。

結局ユイスマンスは1903年の3月一杯ルルドに滞在した。ラ・サレットでは聖母出現の場面を再現した記念群像を見てその悪趣味振りを嘆いた彼であったが、ルルドでは更に厳しい評価を彼は下したのであった。

それは、その一部分がマサビエル洞窟を形作っていることになる岩盤の上に建てられた三層構造を有する新ルルド教会についてであった。それは、マリアの威光を傷つけたくて悪魔が介入した、としか思われぬ程の悪趣味の塊である、とユイスマンスは言うのである。ルルドの新教会は、正に彼に得意の毒舌を揮う絶好の機会を提供している。

ルルドを去るに当たってユイスマンスは同年9月の再訪をルクレール夫妻等に約束していたが実行はなされなかった。彼はミュニエ神父と共にベルギー及びドイツ方面への旅に出掛けてしまったのである。(ユイスマンスがルルド再訪を果たしたのは翌年の1904年9月のことであった)

ユイスマンスがルルドを好まぬ理由

生前、病苦に付き纏われたユイスマンスであったがとりわけ最晩年に彼を襲ったそれは苛酷なものであ

た。しかしながら彼はルルドの泉の奇蹟に縋ろうとはしなかった。

フランスにおける鉄道網の発達により至極簡単に行けるようになったルルド！汽車を降りてからマサビエル洞窟内の奇蹟の泉に行き着くまでの行程も楽々たるものである、切れ目無く舗装されたなだらかな道が目的地まで導いてくれる。その道の両側には、どの店をとっても似たり寄ったりの商品で埋め尽くされた土産物屋がぎっしりと建ち並び、町は旅行者で溢れている。ホテル等の宿泊施設も充実している。ルルドは正に完璧に観光地化されている。まず、このルルドの当世風な繁栄振りがユイスマンスの嫌悪感をそそったことであろう。そして聖地ルルドはユイスマンス独特の神秘的瞑想の末に得られた断定に従えば、聖地ラ・サレットで得た教訓に鑑みて全てが大衆の気に入る様にしつらえられているのである。聖地ルルドでは困難を経た後に目的に辿り着く喜びなど全く無く、ユイスマンスがキリスト教信仰において切望していたところの精神的な高揚を実感するチャンスも皆無である。そのような大衆迎合一色に塗り潰された様な聖地に行きその上、ルルドの泉の奇蹟に縋って病苦から救われたいなどと彼は願っただろうか。それでは、ユイスマンスが最も軽蔑している種類の当世風の軟弱な信者と何ら変わるところが無くなってしまふ。彼が心掛けていた信仰の質からしてもその様なことは先ず有り得ないことであつただろうと思われるのである。

注

- 1 関 一敏『聖母の出現—近代フォーク・カトリシズム考』日本エディタースクール出版部、1993年、p. 35
- 2 同上、p. 26
- 3 同上、p. 123
- 4 同上、p. 131
- 5 LA CATHEDRALE, 14p.
- 6 J. -K. HUYSMANS: *La Haut ou Notre-Dame de la Salette*, CASTERMAN, 1965, 15p.
- 7 16世紀、「メキシコのガグルーへの聖母は真冬に花を咲かせた」(奇蹟の一類型)の故事に拠ったもの。(上記、関氏の著作より、p. 63)
- 8 同上、p. 63
- 9 ベルナデットに二篇の詩を捧げ(1937年)、彼女が担った pénitence (贖罪の苦行) に深い同情を寄せたポール・クロードル (Paul Claudel, 1868-1955) の自作の詩への解説が大変参考になる。(詳しくは栗村道夫先生の御著作『ポール・クロードルの作品における聖徒の交わり』サンパウロ、2000年、p. 610-p. 613を御参照下さい)
- 10 =doctrine de substitution ou de réversibilité mystique (Baldick: LA VIE DE J. K. HUYSMANS, DENOËL, 1975, p. 230)
- 11 ロバート・バルディック著 岡谷公二訳『ユイスマンス伝』学習研究社、1996年、p. 469
- 12 同上、p. 469-p. 470

※ ユイスマンス作品の原書については1972年の SLATKINE
REPRINTS を使用した。

(平成16年9月16日受理)